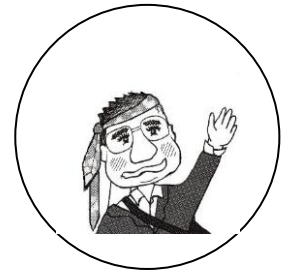


大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「孫悟空が生まれた国」③

わが輩が中国に行く前にも、観光で行くことができた。それは管理されたお仕着せ旅行で、われらヒッピーがたいした目的もなくふらりと行くことはできなかった。

しかし、どうやら中国の一部で自由旅行ができるようだ、という情報が安松編集長やJMの耳に入った。

あのころわが輩は全く中国に興味がなかった。世間では、革命に対するマイナス・イメージが定着していた。だから安松編集長やJMが声をかけなかったら、中国に行くことはなかった。中国自由旅行の資料は英文に頼ったが、それで十分というものではなかった。とにかく行ってみるしか方法がなかった。猪突猛進だ！

1982年4月26日(月)、わが輩は伊丹から香港に飛んだ。インドから帰国するとき香港に途中降機したことがある。そのときと同じ重慶大廈(チョンキン・マンション)の宿に泊まった。重慶大廈といえば聞こえがよいが、九龍・チムサーチョイ(尖沙咀)地区にある雑居ビルである。ネイザンロード(弥敦道)に面しているので移動に便利がよい。1、2階は食堂商店外貨交換店などが軒をつらねている。インド人も多かった。なぜかインド人をみると安心できる。

重慶大廈上階に安ホテルや木賃宿などがあるが玄関には鉄格子がはめられ、ここで襲われたら逃げられない、と思ったこともある。安ホテルは個室だが、木賃宿はドームトリー(2段ベッドの相部屋)であった。今回は取材費なので贅沢に5階の安ホテルにした。125香港ドル/一泊(¥5,500)。到着後すぐに16階のトラベラーズ・ホステルに行き、中国査証申請のためにパスポートと写真2枚、香港ドル150を預けた。

夕方雨になるが、市内を散策し、チョンキン・マンションに帰り夕食を食べた。「うまくない」と日記に書いてあった。香港は食道楽だというのが、やっぱり安いとマズイ。

ところで『チョンキン・マンションのボスは知っている』(小川さやか著 春秋社)を読めば、さらのこの不可思議な空間の謎が解明されるだろう。

1982年4月27日(火)

朝8時起床。ヨガを実修。その後YMCA(尖沙咀)に行き昼食。ショラトン・ホテル前から空港に行き、空港視察。空港よりもう一つのYMCA(油麻地)へ。

(なぜ、2ヶ所のYMCAに行ったのか記憶がない)

日記をめくると、そこの旅行社で中国査証のことを調べたようである。一ヶ月間有効の査証を取得

できるが、手数料は 200 香港ドル (¥8,800) が必要とわかった。香港商人は信用できない。YMC Aなら信用度が高いと思った。しかしクリスチャンだから信用できると考えるのは“香港幻想”である。

地下鉄で尖沙咀YMC Aに戻り散髪した。「夕食を食べたがマズイ！ それに日本より高い！」と日記に書いてあった。

1982年4月28日(水)

夜中に目が覚めてねむれず。結局二度寝で11時に目覚めた。ヨーガを実修。その後昼食。香港新世界大厦にある中国国際旅行社に行き査証について調査。午後はヒマなので香港映画館に行った。わが輩は香港武術映画を観たとき思った。「これを日本で上映したら必ず流行る」と。

わが輩のいう香港武術映画は全くの娯楽作品で、とにかくやたらとワイヤーをつかって俳優が空中を高く飛ぶ。それが新鮮で面白く、日本映画にない迫力があつた。

ブルース・リーの香港映画談義。

ブルース・リーのカンフー映画(1971年)は、すでにアジアを席捲していた。インドでも「カンフーができるか？」と聞かれたことがあつた。それにジャッキー・チェンの映画が続いたが、この二人には違いがあつた。ブルース・リーはシリアス、ジャッキー・チェンのものはコミカルな映画が多かつた。

ブルース・リーは、ワシントン大学で演劇、哲学、心理学を学んだ。高校で哲学の講師をしていた。カンフーと哲学とは意外な組み合わせである。母がユーラシア系とのハーフなので、アーリヤ系の血も少しは入っていただろう。だからインド古典哲学も少しはかじったかもしれない。道教、仏教以外に、クリシュナムルティー(インドの思想家)の影響を受けたのは確かなようである。

ブルース・リーの哲学では、「本能」と「自制心」の調和が求められる。だいたい「本能」と「理性」が対になるが、武道家らしく「自制心」をもってきた。本能が勝れば動物的になり、自制心が勝れば機械的になる。そのバランスが重要だと言う。

ブルース・リーは「自然な不自然」と「不自然な自然」であることを理想としている。これは自然と不自然を超えた「無為」に至る極意である。敵対者を、倒すことなく倒す、ということだろう。

無為自然の哲学なので、道徳的な儒教には批判的であつた。また彼が関心をよせた仏教も、大衆救済的な宗派ではなく個人の悟りを重んじる禅宗であつたであろう。

宗教について訊ねられたとき「一切ない」といい、神について「率直に言えば、本当は信じていない」と答えたという。実利的で、彼はつまるところ“中国人”であつた。勝つか負けるかの二者択一しかない。負けて勝つなどという極めて日本的なものはない。

今日の香港情勢をみると、勝つか負けるかの二者択一しかない。民主派と新中派が民主的に調和するなどという発想は習近平にはない。

ブルース・リーよ。あんたが生きていたなら、一体どちらを倒すのか。

1982年4月29日(木)

8時ころに目覚めたが、9時30分ころまでボウ~としていた。ヨーガ実修のあと、10時30分頃に朝昼兼用の食事を摂り、九龍ロードまで散歩、8ミリで撮影した。YMC Aでコーヒーを飲んだ。

もう香港は飽きた。退屈極まりない。

さて、明日はいよいよ中国本土に向かう。